

九州横断自動車道に伴う発掘調査概報

# 庄ノ原地区遺跡群



大分県教育委員会

1991



## 例 言

- 1, 本書は、九州横断自動車道建設工事に伴う事前発掘調査概報である。
- 2, 調査は、日本道路公団（九州地方建設局）の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
- 3, 調査団の構成は以下の通りである。

調査委員 賀川光夫（大分県文化財保護審議会委員・別府大学教授）

橘 昌信（別府大学教授）

岡村道男（文化庁記念物課）

松沢亜生（奈良国立文化財研究所）

後藤正二（大分県教育庁文化課長）

調査主任 渋谷忠章（県文化課埋蔵文化財 2 係長）

調査員 村上久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主任）、江田 豊（同主任）、綿貫俊一（同主事）、山本健太郎（同嘱託）、染矢和徳（同嘱託）、橋本一彦（同嘱託）

上記関係者のほか、調査期間中に安斎正人（東京大学助手）、長崎潤一（早稲田大学助手）松藤和人（同志社大学講師）、佐藤良二（香芝町教育員会）氏などの視察、助言を得た。

- 4, 本書の執筆と編集は、渋谷、西、江田、染矢、山本があたった。

## 目 次

I	はじめに	( 1 )
	1) 調査に至る経過	( 1 )
	2) 平成 2 年度調査遺跡の概要	( 1 )
	3) 遺跡の立地と環境	( 2 )
II	調査の概要	( 3 )
	1) 庄ノ原 E 区	( 3 )
	2) 庄ノ原 F・G 区	( 4 )
	3) 庄ノ原 H 区	( 5 )
	4) 庄ノ原 I 区	( 9 )
	5) 庄ノ原 J 区	( 12 )
	6) 庄ノ原 B 区	( 17 )
II	まとめ	( 18 )

## I. はじめに

### 1) 調査に至る経過

九州横断自動車道は、既に共用中の九州縦貫自動車道と鳥栖ジャンクションで十字型に直結し九州の東西地区を結ぶ高速自動車道で、長崎市を起点にし長崎～佐賀～福岡及び大分の各県を横断して大分市に至る約252kmの有料道路である。このうち、長崎県大村～大分県日田市間の基本計画は、昭和44年1月22日に計画決定された。また大分県日田市～大分県大分市間の基本計画も昭和47年6月30日に計画決定された。その後、昭和48年10月19日に両区間共整備計画決定及び施行命令が出された。

大分県教育委員会では、日本道路公団福岡建設局の委託を受け、昭和49年5月から道路建設予定地の分布調査を開始し、昭和54年度までに終了した。

大分県内全区間約103kmのうち、湯布院～別府間23.9kmについては昭和55年10月1日から発掘調査を開始し昭和60年度末までに終了した。区間内の遺跡数は9ヶ所であり、この内十文字原第1遺跡、ふいが城遺跡、若杉周辺地区については平成2年既に報告書を刊行済みであり残りの遺跡についても引き続いて整理作業を進めている。

別府～大分間14.8kmについては、昭和59年度から発掘調査を開始した。区間内の遺跡数は3ヶ所でありこのうち2ヶ所（高崎遺跡・机張原遺跡）については昭和62年度までに調査を終了した。

今回報告を行う庄ノ原遺跡は、大分インターチェンジ建設予定地であり約14万㎡の広さを有する。平成元年4月から発掘調査を始め平成3年3月までに未買収地を残し約95%を終了する。

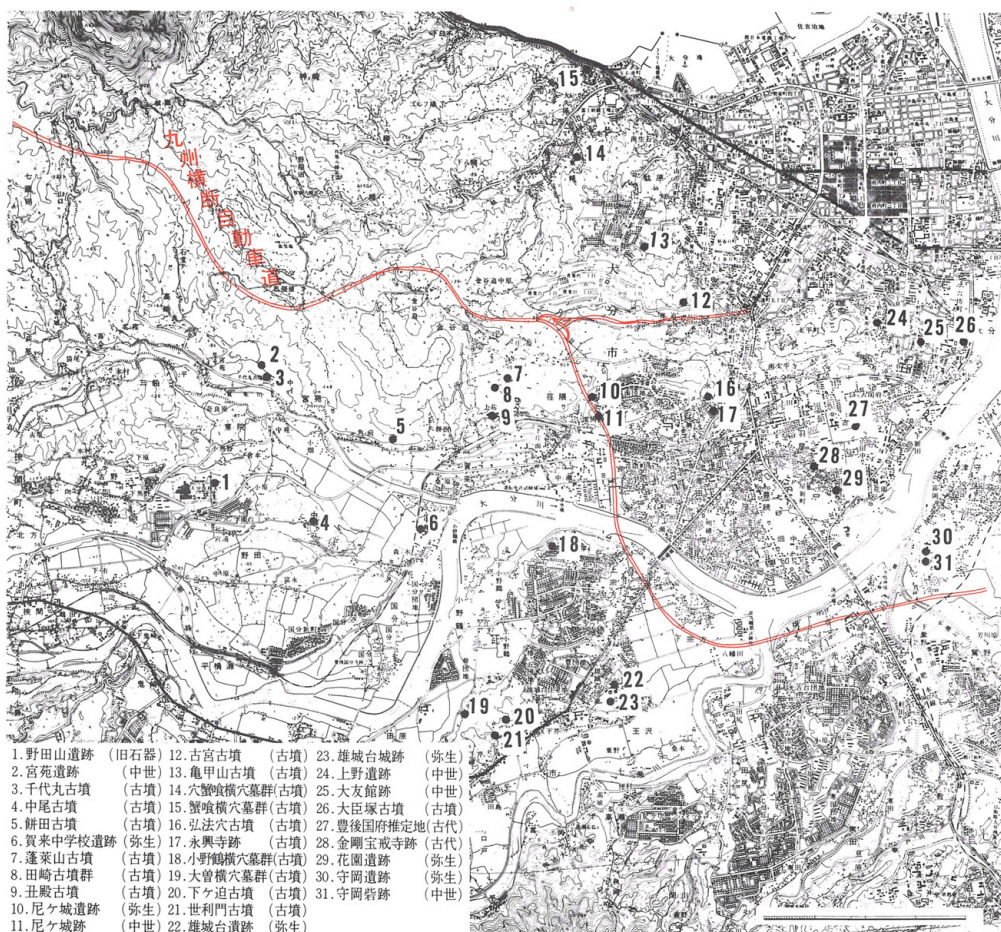
### 2) 平成2年度調査遺跡の概要

今年度の調査は昨年度の継続として古墳時代の住居跡が確認されているH区の調査を皮切りにE～K区までの試掘調査および本調査を実施した。H区では6世紀後半から7世紀の初頭にかけての住居跡が5軒と土坑1基が検出された。この調査と並行してE～G区の試掘調査を行ったがE区を除くその他の地点からは遺物は確認されなかった。いずれもみかん園の造成等による削平を受けているものと考えられる。E区は縄文晩期の遺物が検出されたが当初考えられていた縄文早期の遺物は確認されなかった。

I区は、昨年度の調査で3間×4間の堀立ての建物が確認されていた地点である。今年度はこの建物が検出された南隣りを調査したが6世紀後半～7世紀初頭にかけての溝が1本と柱穴群が検出された。今回の調査では建物を想定し得る柱穴は確認されなかった。

J区は庄ノ原台地の南端に位置する地点で今年度の調査の中心となった地点である。その結果旧石器時代の遺物が検出された。遺物の中心はナイフ型石器で若干数の三稜尖頭器も出土している。その他10基の礫群も確認されている。





第1図 庄ノ原遺跡と周辺遺跡

### 3) 遺跡の立地と環境

庄ノ原遺跡は大分県大分市大字荏隈字庄ノ原に位置し、標高約100mに存在する。庄ノ原遺跡は大分平野の東部にあたり、大分川がその流れを南から東に変えるところに通称庄ノ原と呼ばれる台地がある。この台地の北方には毘沙門川が流れていてその湧水は豊かで古くから周辺に居住する人々にとって貴重な水資源となっている。この庄ノ原一体は古くから遺跡の豊富な地域で、蓬萊山古墳、田崎古墳群、持田古墳群、丑殿古墳、千代丸古墳といった古墳が知られていた。また、毘沙門川を挟んだ斜面上には古宮古墳も存在している。このように古墳時代の遺跡の存在は知られていたがそれ以外の時代の遺跡に関しては調査例も少なくどの程度分布しているかやや不明確な点が多かった。そのなかで旧石器時代の遺跡も昭和36年に調査した地点が不明ではあるが、ローム層中より石器や縦長剥片が採集され、また縄文早期の押型文土器などが確認されている。その結果当台地には旧石器～古墳時代の遺跡が分布した地域であることがうかがえる。



## II. 調査の概要

### 1) 庄ノ原E区

E区は、庄ノ原遺跡群のなかで西部に位置する。地形的には、庄ノ原台地上にあり北側を約10mの谷部、ほか三方は東から西に尻上がりとなる傾斜面を示す。標高は約99m～103mあるが、開墾された畑地のため階段状に削平を受けていた。

遺物・遺構の有無を確かめるため、地形・土層の状態を考慮して、グリッドを3ヵ所、トレンチを6ヵ所設定し調査を行った。その結果、第4層と第5層より、縄文時代の土器片と少数の石器類が出土したが、良好な遺物包含層、遺構は検出されなかった。

第4層および第5層より約140点の遺物が出土したが、ほとんどが縄文土器であった。多くが細片のため機種の判別が困難であるが、縄文時代晩期の土器片と考えられ、この時期の包含層が存在していたことがうかがえる。

今回の調査によって遺構は確認されなかったが、調査区の立地条件、出土遺物から、西側の緩斜面において縄文時代晩期の包含層が広がっていることが確認された。



第2図 庄ノ原E区調査区と周辺地形図



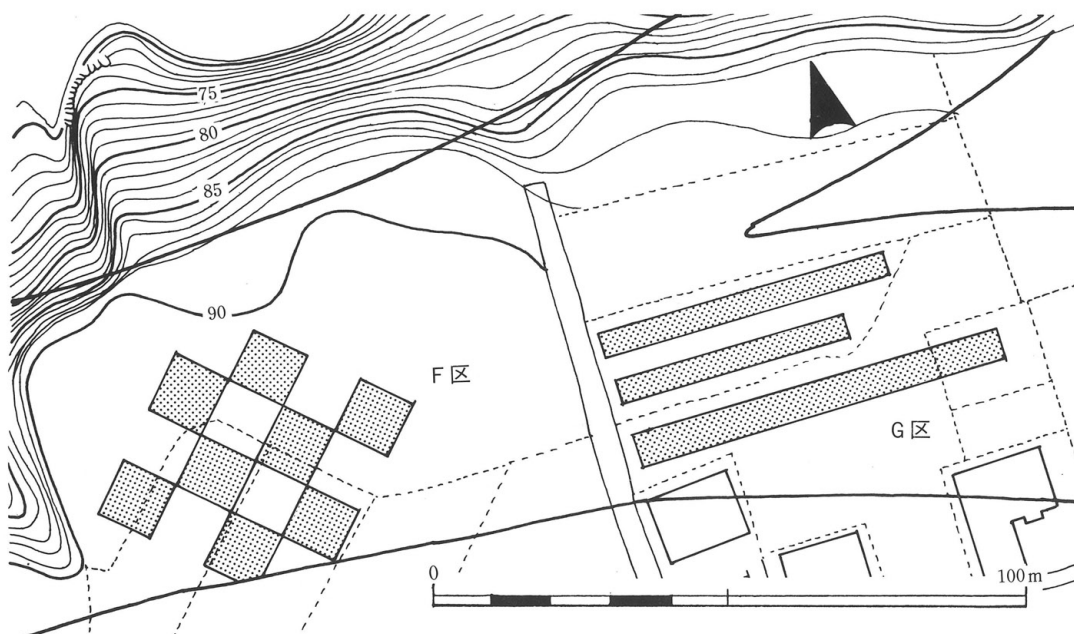
## 2) 庄ノ原F・G区

E区と急峻な谷を挟んでほぼ同レベルの標高にあり東西に広がる台地の北側谷沿いに位置する。調査では、トレンチとグリッドを併用して実施した。F区では10m×10mのグリッドを設定して調査を行ったが、上面を耕作によりかなり削平されていて縄文時代以後の包含層は消滅していた。そこで調査の中心を旧石器時代の包含層の確認においたが流紋岩製の剥片がわずかに数点出土したのみにとどまった。ローム層もかなりの面積が削平を受けていて包含層はほとんど残っていなかった。

G区はF区の東に接する地点でトレンチを2本設定して試掘調査を行ったがF区同様耕作による削平が著しく包含層の確認はできなかった。



庄ノ原F・G区全景



第3図 庄ノ原F・G区調査区および周辺地形図



### 3) 庄ノ原H区

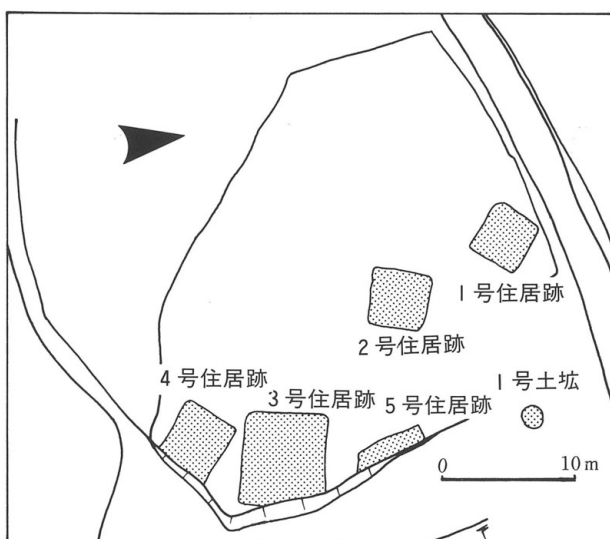
H区は、庄ノ原台地の末端に位置し南西方向に標高約93m～95mの緩やかな傾斜面で舌状に広がる。調査区はみかん園であったため、部分的に深い攪乱、削平を受けていた。

今回の調査によって採集、検出された遺物は縄文を始め弥生時代から古墳時代および中世の各時代に渡る。遺構は調査区南東側に住居跡5軒、土坑2基を確認した。いずれも6世紀後半から7世紀初頭を中心とする古墳時代後期の所産である。

住居跡は3・4号住居跡の残存状態がもっともよく、平面的には方形のプランを呈し4本の主柱穴およびそれぞれ西側にカマド構造を有する。



第4図 庄ノ原H区調査区および周辺地形図



第5図 庄ノ原H区遺構配置図



1・2号住居跡は2本の支柱穴と若干の遺物、5号住居も遺物をそれぞれ確認したが、ともに大きく削平を受けていた。規模的には3×4、5m、4、5×5mに大別することができ、この住居跡群における意図的な作りわけを推定することができる。ほかの遺構については集石遺構ならびに旧石器の剥片を出土する包含層を確認した。



調査区全景

#### 1号住居跡

1号住居跡は一辺約3、5×4mの方形住居跡で2本の支柱穴を有する。堀方は一部削平を受けていて遺物も消失していたが、その他の部分より土器片約270点を出土した。



1号住居跡

#### 2号住居跡

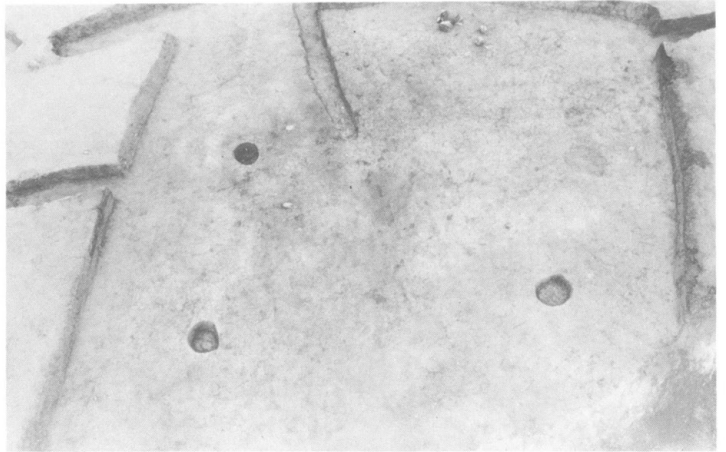
2号住居跡は一辺約5×3mの長方形のプランをもつ住居跡で、2本の支柱穴を配する。住居堀方は約5cm程であるが、土器片約180点を出土した。



2号住居跡

### 3号住居跡

3号住居跡は調査区東南側の末端部に位置して階段状の削平により遺構東側を失っていた。住居跡は一辺約5.5×5.5mの方形プランで支柱穴は4ヶ所、その間に規則的に7ヶ所のピットを検出した。内部構造は南壁沿いに土坑1基、西壁中央部にカマド構造を確認した。遺物は、土器片約300点と須恵器を若干出土した。



3号住居跡

### 3号住居跡カマド

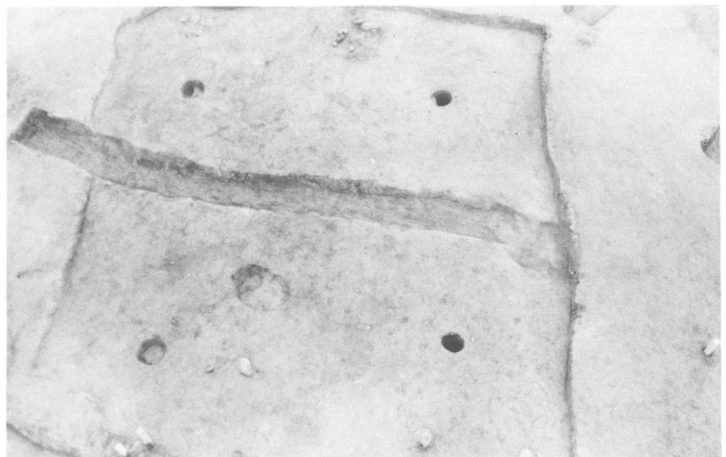
3号住居跡カマドは遺構西壁中央部に位置する。カマドの遺存状態は悪く、2×1.5mの平面的焼土域を確認した。これに添うように深さ約20cmのカマド堀方、土師器の甑底部をそれぞれ検出した。煙道等の施設は確認されなかった。



3号住居跡カマド

### 4号住居跡

4号住居跡は調査区東南隅に検出された。3号住居跡同様削平を受けていて遺構東側壁面をすべて失っていた。住居跡は一辺約4×4mの規模を測り、支柱穴と考えられるピットは4ヶ所で中央部にもピットをもつ。住居内部は西壁中央にカマドを有しほかに土坑も1基確認された。遺物としては土器片約80点を出土した。



4号住居跡



#### 4号住居跡カマド

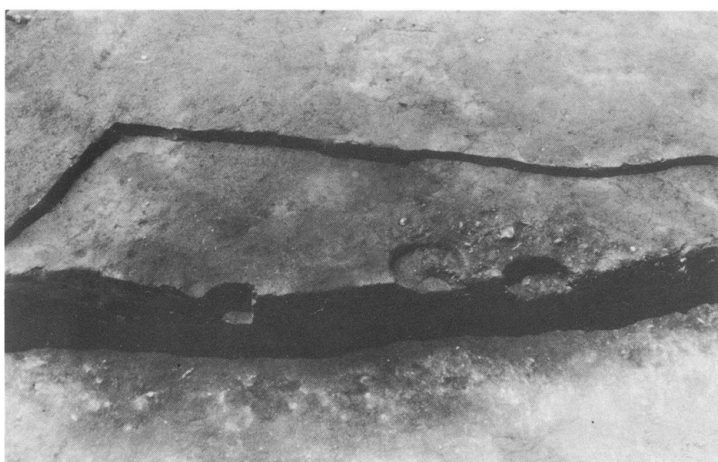
4号住居跡カマドは遺構西壁面のほぼ中央部に作りつけられている。カマドの規模は正確には測定できないが、 $1 \times 1$  mの焼土域と深さ約5 cmの堀方を確認した。遺物としては支脚と想定しうる礫とカマドに関係すると考えられる土器片約20点を焼土中より出土した。また煙道も確認されている。



4号住居跡カマド

#### 5号住居跡

5号住居跡は、調査区最末端部に位置するが階段状の削平によって遺構の西側堀方を残し大半を失っていた。確認された部分から一辺約5 mの方形のプランと考えられる。支柱穴は1本以上、カマドは確認されていない。遺物は土器片を約100点出土した。



5号住居跡

#### 1号土坑

$2.9 \times 2.8$  mの不整形な平面プランを持ち深さは25 cmを測る。遺物は黒褐色の埋土から出土している。遺物はその復元作業から甕、壺と考えられる。この遺構は祭祀的な性格をもつものと考えられる。



1号土坑

#### 4) 庄ノ原Ⅰ区

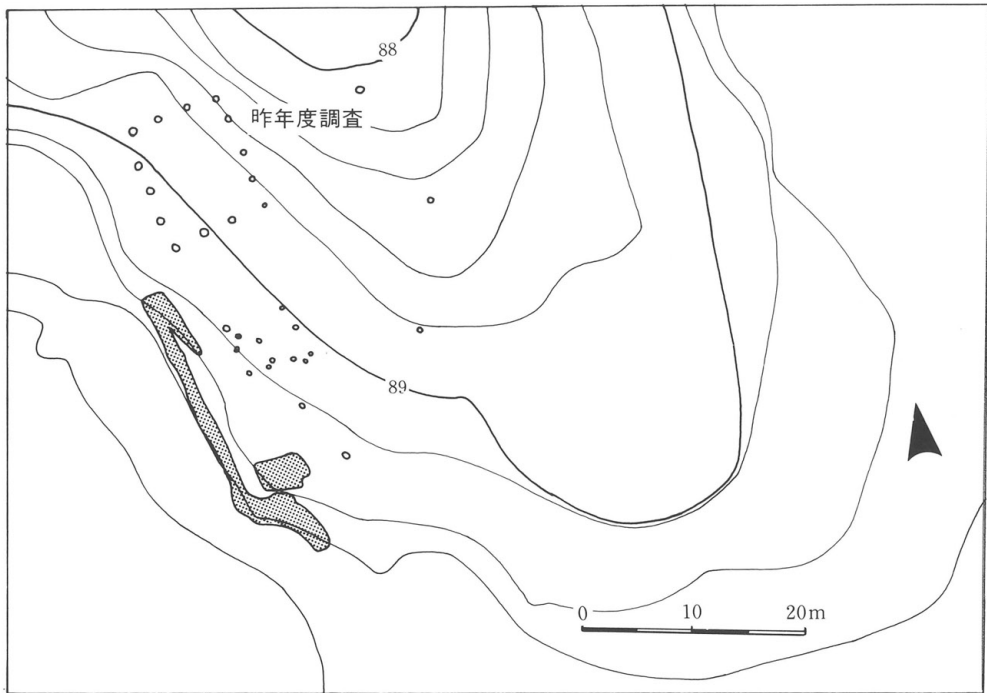
Ⅰ区は前述のⅡ区と深く広い谷を挟んで対峙して南側を除いて三方を谷に囲まれた台地上に位置する。昨年度の調査で、3間×4間の建物が1棟確認されていた地点で今年度残りの約3600㎡の調査を実施した。調査の結果大半の調査区が耕作時の削平を受けていたが、建物が確認されていた地点の南に接する地点で古墳時代の遺構が確認された。この調査区は東に緩やかに下る地形を呈していて、遺構はその中でも低い部分に集中する。

確認された遺構は出土遺物より6世紀末～7世紀初頭の溝と柱穴群で北側にある建物と同時期のものであると思われる。溝はほぼ北方向に延び谷へと落ちて行くものと思われるが建物の手前で削平を受けて消えている。溝の南端部は東方向にL字状に曲がり約3mで削平を受けて消えている。遺構の規模は最大幅約60cm、深さ約30cmの規模をもつ。出土遺物は土師質の土器と須恵器、さらに土錘、鉄鏃等が認められた。須恵器は杯が大半を占めていて3分の1が焼成不十分の製品であった。土錘は20点ほど出土した。柱穴は溝の東側に確認されたが、確実に建物を想定できるものは1棟のみでその外はランダムな状況を呈している。この柱穴群も東に行くほどに数が減少していくが、大半は耕作時の削平に起因するものと考えられる。



第6図 庄ノ原Ⅰ区調査区および周辺地形図





第7図 庄ノ原Ⅰ区遺構配置図



庄ノ原Ⅰ区東側全景



昨年度調査の建物（右）と今年度検出した柱穴



溝内遺物出土状況



## 5) 庄ノ原J区

J区は庄ノ原台地のほぼ中央部に位置して、南側は急峻な谷が深く入りこんで谷の最深部との比高差は約40～50mを測る。台地の突端部からは、南東方向に尼ヶ城一带、さらにその先には雄城台遺跡なども遠望できる。

調査は、昨年度からの継続として5月から実施した。昨年度の調査では礫群およびフレイクが出土して旧石器時代の包含層が確認された。調査区はほぼ東西に約120m南北に約50mの広さを持ち、東側より包含層の確認調査を行った。しかし調査区の東側はみかん園等の造成で削平が著しく遺構、遺物は確認されなかった。調査区の西側には良好な包含層が残っており、表土を除去した後、Ⅰ層～黒色土、Ⅱ層～アカホヤ、Ⅲ層～暗褐色弱粘質土、Ⅳ層～明黄褐色弱粘質土、Ⅴ層～暗黄褐色粘質土(AT)という堆積状態を呈する。このなかで、Ⅲ層からは縄文早期の押型文土器が5点出土した。Ⅳ層は、表土下約40cmにありこの層中から旧石器時代の遺物が集中して出土した。その総点数は500点を数える。また礫群も10基を数えており、このⅣ層内に文化層が形成されていたことが想定できよう。この層から出土した遺物はナイフ型石器、三稜尖頭器、二次加工剥片などが確認されたが、その主体はナイフ型石器である。

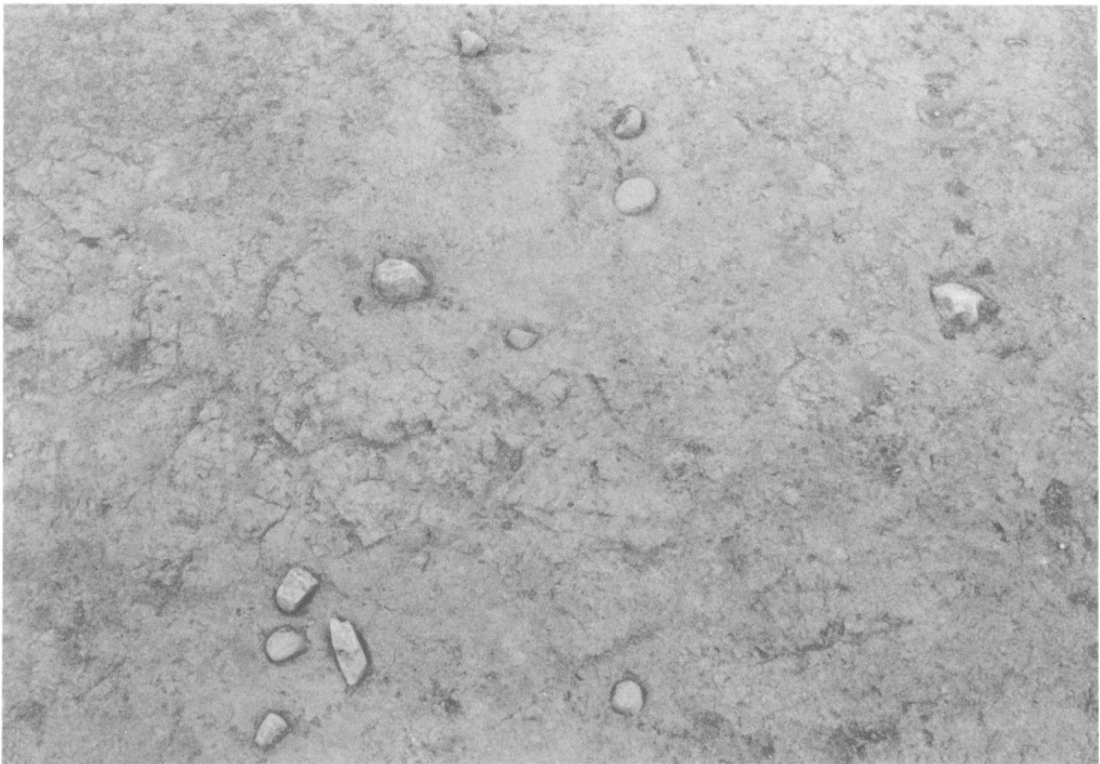
遺物の分布状況は、各グリッドで大きくばらつきがあり密度の低いところは10×10mの中にわずかに4～5点の出土にとどまったところと、同じ面積に150点を超えるところが確認されていておそらく3～4個のブロックが存在するものと考えられる。但し現在のところ遺物はこのⅣ層内のみにとどまっておりⅤ層内からの出土は確認されていない。



第8図 庄ノ原J区調査区および周辺地形図



5号礫群 (E-4 グリッド)



3号礫群 (D-2 グリッド)



4号礫群と遺物出土状況（F-7グリッド）



6号礫群（E-4グリッド）





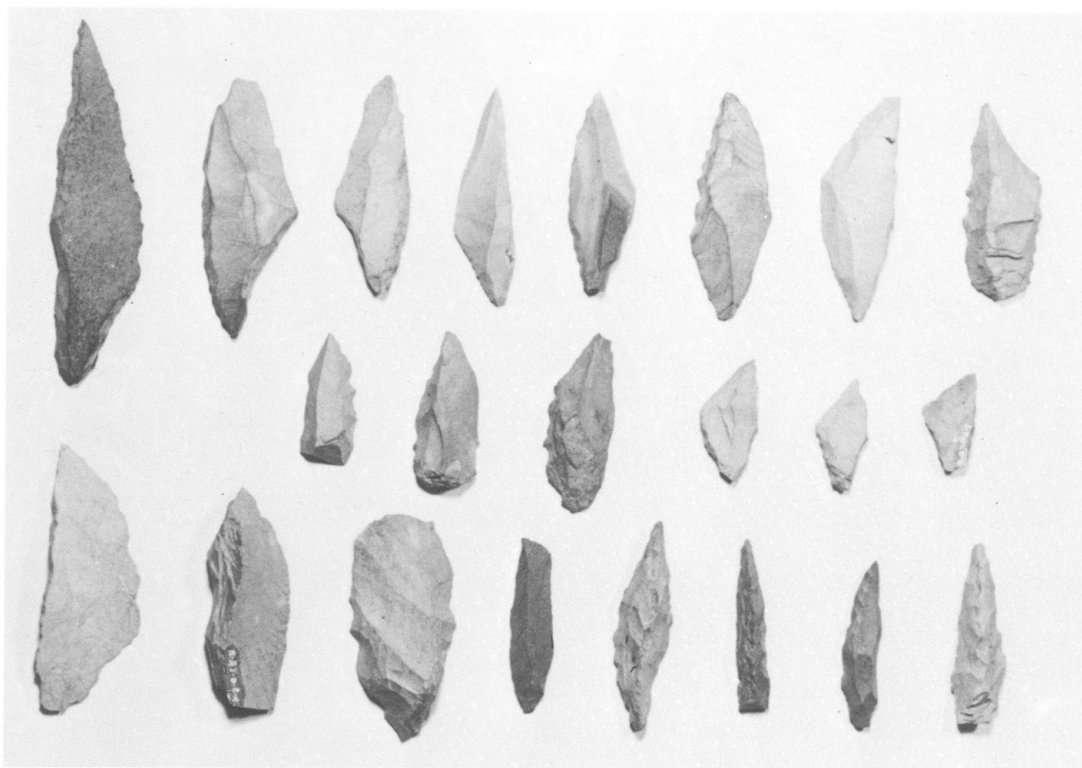
G-6 グリッド遺物出土状況



G-6 グリッド遺物出土状況



遺物出土状況（E-2）グリッド



庄ノ原J区出土遺物

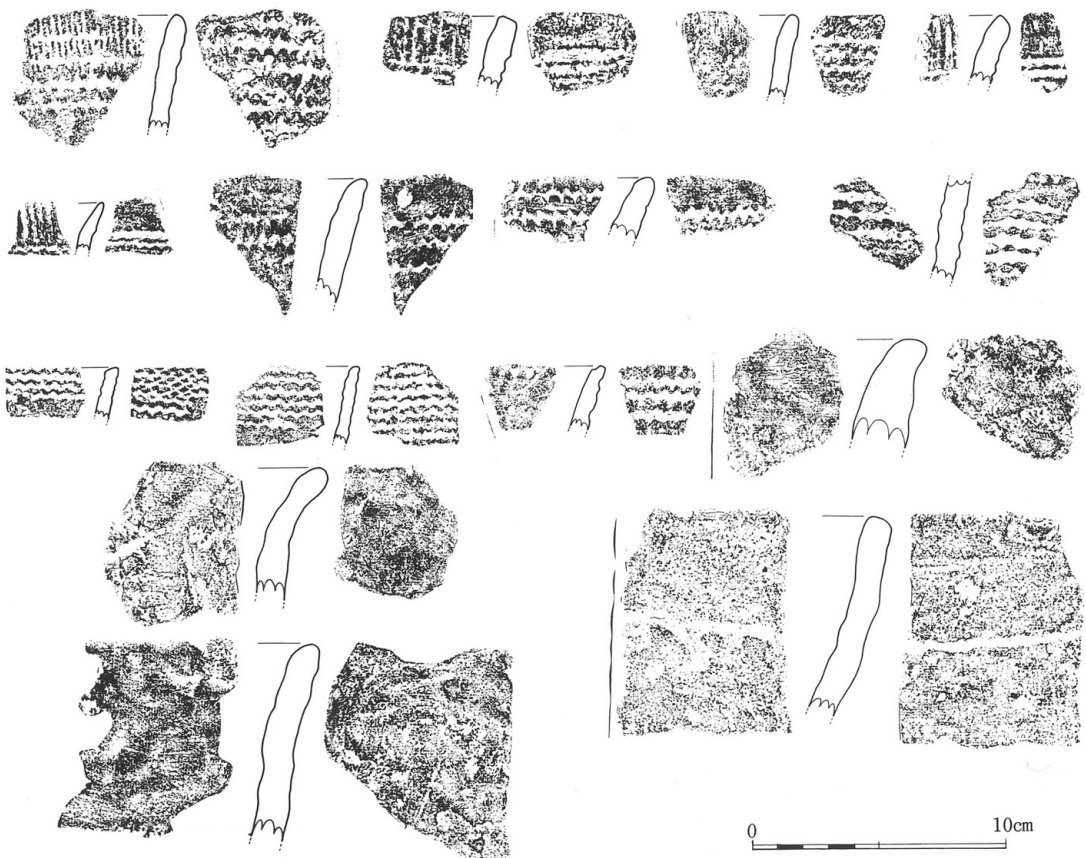
## 6) 庄ノ原B区

B区は昨年度調査を実施した地区で、E区の西に隣り合わせる形で位置する。この調査区は表土下約40cmにアカホヤがありその下に縄文早期の包含層が確認された。その厚さは最大40cmを測り石器、土器などの遺物が得られた。

石器は石鏃が中心で、鋏型石鏃、2等辺三角形石鏃などこの時期の典型的な製品が含まれる。石材は、西北九州産の黒曜石、姫島産黒曜石、チャート、サヌカイトなどが使用されている。ただしその比率からは西北九州産の黒曜石が最も多く使われている。

押型文土器は下図に代表的なものを表したが、すべて外面に横方向の文様を施すものでありその文様は山形文が主体をなす。内面は1. 原体条痕+横方向の施文、2. 横方向の施文、3. 文様を施さないの3種類があり口縁部はほぼ直行しながら開く深鉢型の器形を成すものである。

また同時に無文土器も確認されていてその数は押型文土器の総量を大きく越える。器形は口縁部がほぼ直行するものと、やや口縁端部が外側に張り出すものに大別され、厚手のものと、やや薄手のものとに分けられる。土器の特徴から縄文早期の中頃から後半にかけての所産と考えられる。



第9図 庄ノ原B区出土土器実測図 (1/3)



### III. ま と め

庄ノ原遺跡群は昨年度に引き続いての本調査となった。昨年度の調査で、旧石器～縄文早期～古墳時代の遺跡が確認された地点を引き続いて調査するとともに新たな調査区を設定して調査を行った。縄文早期の包含層は、本年度調査区のE区の西側に位置していたが、その堆積状態は良好で押型文土器を中心とした遺物が出土した。押型文土器はその文様が横方向に施文されるもので、口縁部の内側には原体条痕が施されるものである。また施文された文様はやや粗大化の傾向がうかがわれるもので、縄文時代早期の中頃から後半にかけての所産と考えられる。ただ押型文土器に伴って厚手の無文土器がかなりの数量出土しておりその比率も押型文土器の1.5倍はあるものと推定される。石器に関しては、黒曜石製のものが大半を占め、わずかにチャートが混じる。黒曜石は、姫島産と西北九州産のものがある。比率で見ると西北九州産のものが多くいようである。

さて今年度調査を行ったE～J区は、旧石器～古墳時代の遺構や遺物が確認された。J区では、14200㎡の調査区を設定して調査を行い、そのうち約4500㎡で旧石器の包含層が確認された。出土遺物は、ナイフ型石器が主体を占めそれに三稜尖頭器、二次加工剥片などが共存する。石器の組成から、大野川流域の三重町百枝遺跡の第2文化層、および清川村の岩戸遺跡の岩戸第1文化層に非常に類似している。ナイフ型石器に関しては素材が縦長剥片と横長剥片のものがほぼ2：1の割合で縦長剥片が多く2側辺加工品、斜め整形されたものが見られる。横長剥片のナイフは打面部が非常に分厚くその部分を入念にブランディングを施す1側辺加工の製品もある。ところが、これらのナイフとともに出土する石核に横長剥片を取ったと考えられるものがごくわずかに出土していて横長剥片の製品に関しては持ちこまれた可能性もあると考えられる。ところでこの調査のなかで、4点のやや性格を異とする遺物が出土している。それは製品、あるいは剥片に研磨を施したものである。1点はナイフ型石器を製作後に入念な研磨を両面から施したものの、同様にナイフの基部を欠損したものを磨いたもの、縦長剥片の1側辺を両面から研ぎ出して刃部としたもの、大部分を破損しているが両面を研磨したものがそれである。これらの石器は製作段階は一般的なツールとして製作され、ある時間差をおいて再度研磨を施したものである。旧石器時代には局部磨製石斧に代表されるように研磨技術は既に現れているわけであるが、いわゆる剥片石器にこのような研磨を施すという例がいまだかつてなく、また個々の石器を観察したときにいくつかの問題点もあり、一概にこの時期の所産であるという判断を下すことは大変危険であろう。しかし、これらの石器が出土した状況には後世の混入が考えられない点、ならびにJ区がほぼこの時期の単純な遺跡でこれ以後の時代の包含層が確認されていない点から、これらの石器をどの時期の所産とするものか判断に苦しむところである。いずれにしろ、これらの石器が今までの剥片石器の定義を大きく変えてしまうこと

にもなる問題を含んでいるため、その確認作業は慎重に行ってゆく必要がある。

H及びI区からは6世紀末～7世紀初頭にかけての遺構、遺物が確認された。H区は谷沿いに小さく張り出した舌状台地に住居跡が5軒、その谷を挟んで対峙する台地上のI区にはほぼ同時期の溝と建物を含む柱穴群がそれぞれ検出された。この庄ノ原台地一帯は古くは蓬萊山古墳、田崎古墳群、持田古墳群と古墳の分布が濃いところである。当然この時期の集落もかなりの密度で分布しているものと考えていたわけであるが、調査を行う中で、遺跡として確認されたものは非常に少なかった。湧水もなく台地と谷に流れる毘沙門川との比高差が30～50mにもなる地形がその要因の一つになったと考えられるが、それ以上に後世のみかんなど果樹園の造成が広範囲におよび削平によってかなりの遺跡が消滅したものと考えられる。ただし削平が及んでいない地点には弥生時代の集落も点在しているようで前述の古墳群を形成した過程を示す遺跡がこの台地に存在していたことが確認されている。

最後に今年度の調査がスムーズに行くことができたが、6～9月にかけての酷暑の中黙々と発掘作業に携わっていただいた作業員の皆さんに心より感謝したい。

九州横断自動車道に伴う発掘調査概報

## 庄ノ原遺跡群

1991. 3. 31

発行 大分県教育委員会

印刷 明治印刷株式会社



